

金曜 ライフ・楽しむ

シニア世代を応援するページです

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利さん



胆振地方を襲った大きな地震から3週間が過ぎました。被災された皆様が一日も早く元の生活に戻れますよう、お祈りするばかりです。

地震が起こる前、大阪出身の私は、近畿地方などを襲った台風21号に気をもんでいました。それが北海道に近づき、猛威を振るいました。ようやく風も収まりひと安心して眠った途端、今度は突然の大きな揺れです。

真ッ暗闇の中、とっさに近くの家具を押さえました。居間に集合、家族も家屋も無事なことを確認しましたが詳細は不明です。まだ少し揺れている中、締め切り間近で寝不足気味の私は、もう一度布団にもぐりこみました。

明け方、本州の友人から電話でテレビの情報を見聞きされ、想像以上の大きな被害に驚くとともに、停電の現地では情報を入手する手段がないことに愕然(がくぜん)としました。その後も次々と電話やメールが届き、バッテリーも少し気になり始めていました。

会社も心配です。信号機が全く機能していない中、おっかなびつくり車を走らせ、譲り合いの精神を発揮して交差点を抜け無事に到着。少し棚のものが落ち、引き出しが飛び

出している程度で大きな被害はありません。

停電では仕事にならず、片付けなどしていると、午後3時過ぎに電気がつきました。自宅はまだ停電中、信号のない夜道も嫌なので、「逆帰宅困難者」とでも言うのでしようか、会社に箆城(へいじょう)して編集作業を続けることにしました。市内は場所により停電解消に時間差があり、断水や地震による直接の被害が大きかった地域もありました。

少し落ち着いた頃、いろいろな話が聞かれました。エレベーターが止まり、階段で水を運んだ方の「景色のよ

い高層住宅もこのときばかりはうらんだ」という言葉は切実でした。闇夜で天の川を満喫した人、近所の人たちと庭でバーベキューをした人、ちようど前日に給油したばかりという幸運な人もいました。

コンビニは長蛇の列でしたが、切羽詰まった人ばかりだったのでしようか。「殺気立った客もいてもう地獄。二度と経験したくない」とは、停電中のガソリンスタンドで手回しの道具で対応した人。

不幸中の幸いは冬でなかったことです。私の周りにただ一人「泊原発さえ動いていればこうはならなかった。反原発は行き過ぎだ」と言った人がいましたが、私はそうは思いません。電気のありがたさを痛感した反面、電気のあることに慣れ過ぎた生活をもう一度見直さなければと思いました。そしてできる限りの備えをしておかなければとも。